



電車を動かします

電車開業式
第四話

oerxx

次の日から、車両会社の社員、石原と小野は車庫で、電車の部品の取付けを、始めました。

そこへ、温泉組合の組合長と、電灯会社の社長花田が、四人の若者を連れて来て、石原と小野に、紹介しました。

花田が、

「彼等は、うちの会社で、長い者は五年、短い者でも一年、現場で仕事をしていました。こんどは電車の、仕事をしたてみたいと、いうので連れて来ました。それで電車の仕事を、教えてやって下さい。彼等が、この電車の仕事を、することになりますので、どうか面倒を見てやって下さい。」という、四人が、声を揃えて、

「よろしく、お願いします。」と、いいました。

これを聞いて石原が、

「解りました。もう電車の営業開始までには、あまり時間がありません。それで、私と小野が、二人ずつ引受けますから。私は、主に電車を動かすこと、小野は、電車の保守について、教えることにします。

お客様の、多いときは、二台の電車を動かすことに、なるのですから、みなさんが、動かせるようにならなければ、なりませんし、もし途中で動かなくなったら、助けを呼ぶ前に、自分で何とかしなければ、なりません。

四人の方に、全部教えることは、出来ないかもしれません。それでみなさんは、お互いに、教えあってほしいのです。

また、ときによっては、夜遅くまで、仕事をしてもらうことにもなりますから、承知して下さい」というと、四人は、

「解りました。」とまた、声をそろえて、いいました。

石原は、今度は花田に向かって、

「ゆうべも、お願いしましたが。明日の午後には、電車を省線の駅まで走らせたいので、明日は、上の電線にも電気を送って下さい。運転時間については、お聞きになっているかと、思いますが、昨夜、この電車会社の、社長の山下さんとも、御相談して、午前七時から、午後六時までと決めたので、よろしくお願いします。」といわれて、花田は、

「解りました。」と、返事をしました。

湯ノ津温泉旅館組合が中心となって、出来たこの電車は、『湯ノ津温泉電車』と、名付けられ

、湯ノ津人力車商会在、引受けることになり、人力車商会的社長山下が、そのまま就任しました。

社長は、二足の草鞋をはくことになりました。

電氣は、電灯会社からこの電車の変電所までは、交流で送って来て、電車のモーターは直流モーターなので、

この電車の変電所で、交流モーターを回転させ、同じ軸でつながっている、直流発電機を回転させて、電車に送っていました。

当時は、交流から直流に整流するのには、回転整流器しかありませんでした。これが大きな音を出して回転していました。

石原と小野は、二台の電車に別れて、それぞれ二人の、電車会社の社員を連れて、説明しながら、部品を取付けていきました。それらが一段落すると、石原が、四人を集めて、電車はどうやったら動くのか、どうやったら止まるのか、説明しました。

そして、ブレーキのハンドルは、電気がなくても、回せるので、四人の、見習生にやらせる、ことにしました。

このハンドルは、右に回せば、走っている電車は止まります。左に回せば、ブレーキは緩んで、電車は走ることが出来るのです。ただ、ブレーキのハンドルを回すとき、電車は走っているので、前を見ていなければいけません。目は前を見ながら、手探りでハンドルを、廻すのです。体で覚えるの必要があるのです。前後の運転台で、それぞれ、交代で見習生にやらせました。

当時このような、小さな電車には、空気圧縮機などが付いてなく、運転士がハンドルを、廻して、制輪子を閉めることによって、電車の速度を落したり、止めたりしていました。

そのうちに、だんだんサマになって来ました。肩や腰が痛くなってきたようです。息も荒くなってきました。見ていた、石原が、

「みなさん。腰が痛くなったようですね。運転士にしても、車掌にしても、ズート立ち仕事だから、いまは止まっているので、床は、揺れてないが、実際には、揺れているんだ。ただ、立っているだけでなく、揺れてもころばないように、踏ん張っていなきゃならないんだから。体が慣れるまでは、もっとつらいから、そのつもりで、頑張ってください。」と言いました。

四人の、見習生は、これからどんなことが、起きるのか、心配になりました。

石原は続けて、

「今日やってもらったときは、電車が動いていないので、空廻しなんです。軽いと感じたでしょうが、明日は、電車を、走らせて廻してもらいますから、目は前から、絶対に反らさないで、下さい。もし前に何かあって、それを見落としたりしたら、それに電車がぶつかったりして、命取りになるかも知れませんから。」と、いいました。

石原と、見習生四人が、電車から降りて来ると、小野が約30cm四方くらいの、沢山の板と、太い針金を持って来ました。これを見た、石原は、白いペンキと刷毛を、持ってきて、見習生たちに、

「この板の、丸と、三角と、Xを、大きく書いて下さい。そして、柱の括りつけられるように、この太い針金を、通して下さい。」と、見習生に頼みました。

そのとき、土木会社の社長、太田がやって来て、石原に、

「昨日荒らされた砂利を、直して来ました。」というので、石原は

「御苦労さんでした。明日から、電車を走らせるが、運転士が慣れてくるまでは、ユックリ走らせるが、慣れてくれば、だんだん速くなる、すると砂利の痛みも、早くなるし、ひどくなると思います。それがある時期になれば、落ち着いてくると、と思いますが、それまでは、よろしくお願ひします。」というので、太田は、

「ハイ。承知しました。」というので、帰って行きました。

翌朝、七時になると、変電所の発電機が、廻り始めました。大きな音です。

石原は、四人の見習生を集めて、いきました。

「今日から、電車の動かし方、止める方法を教えます。これから、今日教えることは、全部今日覚えて下さい。無理とは思いますが、明日は、また違うことを教えますので」といって、続けて、

「まず、前の日、電車を車庫に閉まったら、屋根の上にある、ポールを降ろして、その紐を、電車の運転台の、柱にくくりつけます。

ポールとは、電車の屋根に付いている、金属製の棒で、同じように、屋根に付いている、バネで押し上げられています。そして、その先端には、滑車がついていて、その滑車の溝の中に電線を入れます。滑車が電線を、挟んでいるのです。

この滑車、電線に接触することで、電線に流れている電気は、電車に供給され、電車は、動くことができるように、なるのです。

「その次に、ブレーキのハンドルを、右に最後まで廻して置きます。するとブレーキは完全に締まります。」

「そして、どの車輪でもいいですから、『歯止め』をします。」というので、三角形に、削った角

材を、電車の床下から、取出して、見習生達に見せました。

それは、石原が、土木会社の社長太田に、頼んで作ってもらったものです。

長さ30cm位に、切った角材を、三角形にして、その斜面は直線でなく、曲線になっていました。

その曲線が、車輪の曲線と一致していて、線路と車輪の間に、挟込むようになって、いました。石原は、

「長い時間止めて置くときは、これを車輪と線路の間には、挟んで下さい。線路が平らなら、車輪の両側から、坂道だったら、低いほうの、右と左の、車輪に挟んで下さい。」と、いって、車輪の両側に挟みました。そして、

「夜電車の、運転が終わったたら、電車はこのような状態にしてから、帰って下さい。もちろん、扉は閉めて、鍵はかけて下さいね。

それでは、朝出勤してきたときの、仕事の順序を、教えます。」石原の話は、まだ続きます。

「まず、『歯止め』を、外します。これは、いつでも、使いますから、失くさないように、使わないときはここへ、仕舞っておいて、下さい。」と、いって、車体の下にある、受け金物を、教えました。

「次に、ポールを上げます。ポールの先に付いているのは、滑車です。その溝の中に、上の電線が入るように、上げます。」と、いって、やって、見せました。紐をほどいて、その紐を引張り、紐を緩めると、バネの力で、ポールは上へ、上がって行きます。うまく紐を操って、滑車の溝が電線を挟みました。

その直前に、青白い閃光が飛んで、見習生達は驚きました。

すぐに、石原は紐を引いて、ポールを降ろすと、前よりも滑車が低い位置で、紐を放しました。

すると、ポールはバネの力で、勢いよく飛び上がり、滑車は電線に接触しましたが、反動で離れ、また接触し、また離れ、また接触と、繰返し、ようやく、電線を挟み、上下運動も止まりました。だが、そのたびに、青白い閃光が、飛び、電気を知っている、見習生達の顔も、青ざめていました。

石原は、見習生達に向かって、

「これから、二人ずつ前と、後ろに別れて、ポールを、上げたり、下げたしてもらいます。青白い閃光、スパークは、御存知のように、電線を切る恐れがあります。なるべく、スパークを飛ば

さないように、滑車の溝で、電線を挟んで下さい。滑車の溝が、電線を挟んだことが解ったら、紐は柱に縛って下さい。

また、ポールを降ろしたら、屋根も上に、？形(フック)になっている、金物がありますから、それに引っかけて、また紐は柱に縛って下さい。

それでは、始めていただきます。この仕事は首と腕と腰は、痛くなる位、大事な仕事です。最初はスパークが、飛ばないように電気を、切って置きますから。」とあって、電線の送電を、止めるため、遮断器を、開放しました。

見習生達は、前と後ろに、別れて、ポールを上げ下げを、始めました。

ポールを、下から、紐で操って、その滑車の溝に、電線を挟込む、作業をやっていった、見習生達は、何度も繰り返して、いるうちに、サマになって来ました。そのために、首、肩、腕、腰は痛くなって、来たので・出来栄えとは、うらはらに、痛さを、こらえているので、顔の表情は、冴えませんでした。

その様子を見ていた、石原が、
「少し、休憩をしよう。もっと練習したい人は、自由にやってもいいですよ。休憩が終わったら、車庫から電車を、外へ出して、外で、電車を動かしますから。」と、いいました。それを、聞いた、見習生達は、互いに顔を、見合わせ、ホットした表情になりました。

休憩が終わると、石原は、見習生達に、向かって、
「この中で、ポールを上げるのが上手に、出来るのは、俺だと言う人がいたら、手を上げて下さい。」と言いました。

見習生達は、互いに、顔を見合わせるばかりで、誰も手を、上げませんでした。すると、石原は、

「それでは、見ていて、誰が、一番上手だと、思いましたか。」と、尋ねると、中の一人が、
「田中さんです。」という、他の二人も、異口同音に、
「田中さんです。」と言いました。名差しされた田中は、見習生の中では、最年長者のようでした。

石原は、続けて、
「それでは田中さん、あなたがポールを上げて下さい。これから、電車を外に出して、動かす方法を教えますから。」という、見習生達は、この狭い車庫から出ることが、出来るかと、ホットした、顔をしました。
「解りました。」と、口々にいいました。

石原は続けます。
「それでは、田中さん、電車を動かす準備をして下さい。後のみなさんは、もし、自分ならどうする、次は何をするのか、頭の中で、考えながら、見ていて下さい。そして田中さんが間違えたら、教えてあげて下さい。」といい、入口に近い壁の隅に行き、

「電車を動かすための、電気を送ります。」と、壁の隅にある、上から下がっている、遮断器の棒を、上に上げました。それを見ていた、田中は、シマッタという顔をしました。

石原は、続けます。

「まず、朝来たときには、今日動かす電車の、上の電線に電気を、送ります。電気の遮断器は、右側の電車の電線は、入って来て右側に、左側の電車の電線の、遮断器は左側にあります。右左に別けたのは、間違えたくても、間違えないようになっています。

いま、私は遮断器を入れました。そしたら、この札を、ここに掛けて下さい。」
その札には、白く塗った板に、『送電中』と、赤い文字で書いて、ありました。

「電車が、今日の仕事が終わって、ここに入って来たら、すぐに遮断器は切って下さい。点検などで、必要なとき以外は、送らないで下さい。そして、送ったら必ずこの札は、掛けて下さい。なぜかと、いいますと、点検や、修理で、しばしば、屋根に上ることが、ありますが、ほかのことに、夢中になっていると、電線のあることを忘れて、電線に触れるかも、しれません。それを、防止するためです。今日は、私が入れました。では、田中さん始めて下さい。」

石原に、呼ばれて、田中は始めました。

まず、車体の下を見ながら、一周して、歯止めを捜しました。見付けると、車体の下に入り、『歯止め』を、外しました。

それを見ていた、石原は、

「いま電車を、動かすのは、あなた達四人だけだから、歯止めをするのも、外すのもあなた達だけです。電車の車輪は、八ヶ所あります。そして、ここの線路は平らです。あとでみんなで、相談して、どこにするか決めておけば、外すときに楽だと思いますが。

それではまた、田中さん、続けて下さい。」と、いわれ、田中は車庫の出口に近い、運転台の柱に縛ってあった、ポールの紐を解きました。

すると、見ていた見習生の中から、

「アッー。」と声が出ました。それを、聞いた石原は、声をした方を向いて、

「どうしたのですか、」と、尋ねました。声を発した見習生の大川は、口ごもりながら、

「電車は、これから、外へ出て行くんですよね。」と、いって、同意を求めました。石原が、

「そうですよ。」という

「それでは、出口より遠い方の、ポールを上げないと、近い方だと不自然だと、と思いますが。

」

電車が、ポールを上げて、走っている姿を、横から見ると、ポーは、電車の屋根から、電線に向かって、斜めになっています。そのポールは、電線より低い屋根から、屋根より高いところに

ある電線を、先端に取付けて滑車が、挟んでいるのです。

そして、線路も電線も、平らではありません。動いている電車も、揺れます。

滑車は、外れやすいのです。外れないように、、また外れると、電車を止まってしまう、先へ進めないことにも、なります。それで、ポールの滑車の、フォローは、後ろに乗っている、車掌の仕事になっているのです。

素人が見ても、形が、不自然だし、滑車のフォローもあるので、後ろ、いまは、車庫の出口より遠いほうの、ポールを上げるのが、正解なのです。

それを、聞いた石原は、

「田中さん、紐を引いて、ポールを下げ、屋根の上にある、？状に曲がっている、フックに掛けて、紐を柱に巻いて、こちらへ、来て下さい。」といい、田中が来るのを、待ってから、

「田中さん。床に電車が、ポールを上げて走っている姿を、書いてみて下さい。」といわれ、田中は白墨で、床に書きました。石原はその電車の外側の左右に、外向きに、矢印を書いて、

「電車が、これから走って行く方向は、この絵で右がですか、左ですか、みなさんどちらだと、思いますか。自分が思った方の矢印の先に、御自分の、名前を書いて下さい。田中さんも、さっきと同じでなくても、かまいませんから、いまあなたが、考えているほうに、お名前を、書いて下さい。」といいました。

四人の見習生達は、思い思いに、自分の名前を書きました。それを見て石原は、

「みなさん、同じですね。田中さんは、考えが変わったようですが、これでよろしいですか。」と聞かれ、田中は、

「絵を見る限りでは、電車が走って行く、方向と反対側のほうが、自然に見えますが、」とまだ腑に落ちない様子でした。石原は、

「みなさんの、考えが一致したので、今日は、これを正解として、おきます。みなさんが、御自分で思うように、電車を動かすことが、出来るようになったら、多分この理由は、お解りいただけると、思います。 それでは、田中さん続けて下さい。」といわれ、今度は、車庫の入口から遠いほうの、ポールを上げるために、紐を解き始めました。

紐を解き終わると、その紐を持って線路の中央に、電車の方に向いてから、それまでシッカリ引っ張っていた紐を、少しずつ緩ませました。ポールの先端の滑車は、バネの力で少しずつ上に、上がり始めました。

あと少しで、ポールの先端が、電線に触れると思われたとき、田中は紐を、放してしまいました。

ポールは宙を飛んで、電線より高い所で、止まり紐は伸びきっていました。

田中は慌てて、紐を引いて、ポールを降ろして、電車の屋根にある、フックに掛け、紐は柱に縛りつけました。

それを、見ていた石原は、

「田中さん、ポールの先端が、電線に接触するまでは、紐から、手を放してはいけません。スパ

ークが怖かったのですか。みなさんもそうですが、これは、慣れて下さい。それと、ここの線路は、真直ぐですから、電線は右の線路と、左の線路の、ほぼ真ん中に張ってあるはずですよ。みなさんは線路の真ん中に立って、ポールを上げて下さい。」

石原は、続けます。

「ポールを、上げるときに立つ位置は、なるべく電車から、離れたほうがいいですよ。首をあまり曲げずに、済みますから、首が痛くなりませんから。

では、田中さん、ポールを上げて下さい。今度は逃げないで、ポールの先端の、滑車が電線に触れるまで、紐を、放さないで下さい。」といわれ、

田中は、こんどは、うまくやろうという、顔をして、まず、紐をほどき、紐を長く伸ばして、電車から離れて、今度は足下を見廻して、線路の中心にいるかを、見極め、電車に正対しました。そして紐を伸ばし始めました。

ポールは、バネの力で、上に上がって行きます。他の三人の見習生は、固唾を呑んで、見守っています。

最後まで、紐を放さなかったのも、滑車が、電線に触れたときは、スパークが飛びましたが、バネの力で、電線を完全に、挟んでいました。

見ていた人達は、思わず拍手をしました。田中は照れくさそうに、笑っていました。

石原は、田中に向かって、

「田中さん、次は、何をしますか。」と、尋ねると、田中は、

「ブレーキの、ハンドルを回して、ブレーキを緩めます。」

「そうですね。でもいまは、それを少し待っていて、下さい。今日はこれから、二台の電車を、動かします。もう一台のほうも、動かす準備をします。

それでは、あちらの、電車は、山川さん、準備して下さい。」といわれて、山川は、別の電車にいき、歯止めを外し、ポールを上げました。

石原は、

「それでは、こちらの電車が先に、車庫を出ていきますから、みなさんは、こちらに乗って下さい。」とあって、田中が、ポールを上げた電車に、みんなを連れ戻し、運転台に乗りました。そして

「サアー、これから、出発します。」とあって、運転台の右側窓上にある、大きなスイッチを、指差して、

「いま電気はここまで来ています。」とあって、スイッチを入れ、

「このスイッチは、片側にしかありませんから、承知して下さい。」とあって、運転台の正

面に立ち、

「今日は、私が運転しますから、よく見ていて下さい。」といました。

運転台の、正面左には、楕円形をした、金属製の筒が立っていて、その頂部は蓋がしてあり、左側には水平に、廻すハンドルが付いていました。これは、『主幹制御器』、または『マスターコントローラー』略して『マスコン』といます。

そして、右側には、さっき練習した、ブレーキハンドルがあり、その間に立って、電車を運転するのです。

石原は、そこに立って、

「みなさんは、私の脇から、私のすることを見て、覚えて下さい。また、私の質問に答えて下さい。私は、みなさんの、顔が見えませんが、名差しできません。どなたでもいいですから、答えて下さい。」

「それでは、このマスコンについて、説明します。まず、右側の受け口に、このレバーを差込みます。」と、Z形をつぶしたような金具を、取出しました。

その先端はU字形にくびれていて、マスコンの右にある、受け口の右側から、受け口に差し込みました。

レバーの先端の先の円筒形の表面には、『中』、と書いてあり、レバーを前に動かすと、その先の表面には、『前』、手前へ引くと、そこには、『後』と、書いてありました。

石原は、

「先程、電気が、ここまで、このマスコンまで来ているといいました。この大きなハンドルを動かせば、電車は動くのです。だが今はこの大きなハンドルが、動かないのです。これを動かすには、この右のレバーを操作することによって、左の大きなハンドルは、初めて動くのです。

電車を、前に進ませたいときには、前に押し、後ろに行きたいときは、手前に引きます、必ず止まる場所まで、動かして下さい。そして、電車を動かさないときには、真ん中にして、抜取って持っていて下さい。抜取るときは、真ん中で、抜取って下さい。それ以外に場所では、抜取れないはずですから、みなさんやって見て下さい。」といい、見習生達と場所を、交代しました。

石原は、さらに続けて、左側にある、大きなハンドルについて、説明をしました。

「これで、電車のモーターに電気を、送って電車を、動かします。」

大きなハンドルの反対側には、その根元に三角形の、突起が付いていて、円筒形の表面には、目盛が付いていました。

「いまは、まだモーターに電気は、送られていません。これを一つ次の目盛まで動かすと、電車は、動き出します。

それでは、電車を、動かします。」と、ブレーキのハンドルを緩めて、マスコンのハンドルを、一目盛だけ動かしました。

電車は、動き出しました。すぐに、マスコンのハンドルを戻して、ブレーキのハンドルを回して、電車を止めました。

石原は、後ろを見て、廻りにいる、見習生達に向かって、

「サア、これで、電車は動くことが、出来るようになりました。この線路の上を走って、省線

の駅まで行きたいのですが、大丈夫でしょうか、行くことが出来ると、思いますか、」と、問いかけました。

見習生達は、お互いに顔を見合わせて、いるばかりでしたが。しはらくして、恐るおそる、山川が、小さな声で、

「出来ない、と思いますが。」という、他の見習生達は、そんなことはないよと、というような顔付きをしました。

すかさず、石原は、

「山川さん、どうしてそう思ったのですか、みんなに、解るように説明して下さい。」という、山川は、

「いま、この電車が載っている線路には、すぐに左から来る線路が、合流しています。一この呼電車の車輪は、左右の内側につば(フランジ)が付いていて、これが、線路の下まで出ています。

線路を見ると、こちらの左側の、線路は、合流する手前で切れています。右側の線路は、左側から来る線路の、合流点で、フランジの通る位置にも、左側から来る線路が、密着していて、フランジは、そこに、乗上げてしまいます。

ですから、この電車は、行けば脱線すると、と思いますが。」と、説明しました。

これを、聞いていた、他の見習生達は、不思議そうな顔をしました。一方石原は、

「それでは、山川さんの話しが正しいか、どうか、電車を、合流点(ポイント)の近くまで、動かしますから、車輪と、線路の関係が、どうなっているのか、よく見て、もし山川さんの話しが、正しいと思ったら、彼の肩を、一つ叩いてあげて下さい。」と、電車を、動かして、ポイントの近くまで、移動させました。

電車が止まると、見習生達は、すぐに降りていき、電車の下の方を見たり、線路の、合流状態を、見ていましたが、山川の傍へ来ると、彼の肩を、叩きました。山川はうれしそうな、顔をしてました。すると、石原は、

「この先に、駅から来た線路と、合流するところがありますが、そこはどうでしょう。みなさん見て来て下さい。」という、見習生達は、見に行きました。」

戻って来た、見習生達は、口々に、

「駄目です。」

「行けません。」と、報告しました。

石原は、

「線路が二ヶ所も駄目では、電車を、走らせることが、出来ないの、どうしたよいか、調べ

に行きましょう。」と、いって、先に立って、歩きだしました。そして、左側の車庫から出て来ている、線路との、合流点に来ると、見習生達に向かって、

「どうすればよいか、みなさんで、調べてみましょう。」と言いました。

この合流点では、四本の線路が、二本のなって、先へ伸びていました。内側になった、二本は、ここで終わっていました。

終わりになっている、線路の先端は、薄くなっていて、その右側は、外側の線路に寄添って、いました。また左側の線路も、薄くなってはいましたが、外側の線路とは、大きく離れていました。

その、内側の左右、二本の線路は、下で幅の狭い厚い帯のような、鉄板でつながれていて、その片方は、線路の外に出ていました。

その、帯鉄は、前後に動かせるような、テコが付いていて、それに直径30cm位の丸い厚い鉄板が、刀のつばのようなものが付いていて、上半分は黒、下半分は白く塗られていました。その他の部分は真っ黒に、塗られていました。

見習生達は、これが、あやしいと、思ったのか、しきりに覗込んで、いました。その中の一人、川田が、石原に向かって、動かしてもよいかと、尋ねました。石原が、どうぞというと、川田は、テコを持上げて、テコの先端を、前から半円を描いて、後ろに倒そうとしました。

川田はそのテコを、持上げて、反対側に倒そうとしましたが、一人では持ち上がりませんでした。それは、錨が錘の役目もしているからでした。それで四苦八苦している川田を見て、見習生の一人、島田が駆寄って来て、二人の力でどうにか、持上げて、反対側に倒すことが、出来ました。

すると、その瞬間、『ガチャン』と、大きな音がして、内側の二本の線路が、左に動いて、左側の線路は、外側の左の線路に密着し、右側の線路は左に動いたので、外側にある右側の線路との間に、隙間ができて、フランジも、難なく通れるようになりました。見ていた他の見習生達は、ホットした顔をして、拍手をしました。続いて、石原は、

「これで、こちらは、解決しましたね。それでは、次の、駅から来た線路との、合流点を、調べてみましょう。」と、見習生達を、連れて歩き始めました。

そこは、前のところと、同じように、内側の二本の線路を、一緒にした帯鉄が出ていましたが、その先は、違っていました。

その、線路の外に出た先端には、鑄鉄製の、四本の、高さが60cmくらいの、柱が立っていて、その頂部は台座になっていました。その台座の脇には、テコが下向きに付いていて、その頭には、かんぬきが刺してあり、テコを動かすには、このかんぬきを、抜く必要がありそうでした。

その、台座の上には、縦に円形の板と、それに直交して、矢羽根の形をした、鉄板が下向きに取付けてあり、

円形の板は、裏も表も青く塗ってあり、その中央に水平に、白い帯が一本引かれていて、一方、矢羽根形の板は、黄色く塗られていて、その中央に下向き斜めの、黒い帯が一本引かれていました。

最頂部には、四方向に、ランプが付いていて、東西方向は、青のレンズ、南北方向は、だいだい色のレンズが付いていました。これらを、『転轍機標識』といいます。

見習生達は、ここに集まって来ると、石原のほうを見たので、石原は、

「どうぞ、みなさんが、思う通りに、やって下さい。ただ意見が違って、喧嘩をしないように。」といました。

見習生達は、テコのかんぬきを抜くと、テコを上げて左右に、動かしました。すると、一方向だけに動いて、それも90°動いただけで止まりました。

すると、先程と同じように、内側に二本の線路は、右に動いて、電車の車輪は、通れるようになりしました。

これを見ていた、石原は、見習生達にいました。

「まず、このポイントの、かんぬきは、必ず差込んで下さい。そして、このポイントは、営業が始まれば、駅で管理しますから、みなさんは、動かして欲しいときは、必ず駅に頼んで下さい。駅の許可なく、動かしてはいけません。

あちらの、車庫の、左にするか、右にするかのほうは、みなさんが、自由に動かしても、かまいませんけど」

「そして、この二つのポイントの、前後には、『一旦停止 進路確認』という、看板を、明日建てますから、必ず守って下さい。それから、これを見て下さい。」とあって、石原が、指差したのは、

合流点の手前、Yの字形になっている、左右の線路の間の地面に、頭を白く塗った木製の、四角い葺の形をしてました。

「これは、『車両限界標識』と、いいます。これよりも、分岐点に近いほうに、電車が止まっていると、電車のいないほうの、線路に別の電車が、入ってくると、電車同士が、ぶつかってしまいます。それで、電車を止めるときには、この標識より、分岐点に近いほうには、止めては、いけませんよ。という意味があります。」

「それでは、電車を、省線の駅のほうに、動かしていきましょう、みなさんは、前の電車に乗って下さい。」と、石原はあって、四人の見習生を、乗せて、電車は動き始めました。石原は、電車を運転しながら、

「電車を、動かしているときは、いつでも前を見て居て下さい。どんなことが、起きるのか、解らないので、そのときに、電車を止める必要があれば、すぐに、止めなければ、いけませんから。」とって、動かしたかと、思うと直ぐに止めて、降りて行きました。

その手には、赤い布を旗にした棒を、持っていました。その棒を、線路の脇に差すと、戻って来ました。

電車に乗込むと、石原は

「サア、今度は本当に、行きましょう。」といて、

「最初から、おさらいをしましょう。まず、朝来て、電車を、動かすときには、今日動かす電車が、止まっているほうの、遮断器を入れて、電線に電気を送ります。次に、歯止めを、外します。そして、ポールを上げて、電車に、電気を、送込みます。次には、マスコンの右側に、レバーを差し込み、このレバーを前に動かして『前』の位置で止めます。」

石原は、続けます。

「いまは、ここまで仕事は、終わっています。この先は、まずブレーキを、緩めます。そして、マスコンの左にある、大きいハンドル前に送ってを、一目盛進めます。そうすれば、電車は動き出しますから、さらに、一目盛進めると、電車は、さらに速く走ります。そして四目盛まで、ハンドルを動かすと、この電車が出せる、最高の速度で走ります。」

さらに、続けます。

「最初走出すときに、いきなり最後の四番目まで、ハンドルを、持って行ってはいけません。電車のモーターは、いきなり、速く回転することは、出来ませんから、一目盛つつ、順番に動かして、行って下さい。

モーターが、回転を始めると、音がだんだんと、高くなります。その音を、よく聞いていて、その音が頂点に達したら、ハンドルを、次の目盛に進めて下さい。

これを、せっかちに速く進めると、モーターは、次の段階に入る、準備ができていないので、回転することを、拒否して、電気は、モーターに流れていかなく、なります。そうすると、最初から、やりなおしに、なります。だから、十分にモーターが、準備出来る、時間を与えてあげて、下さい。

そして、これ以上、速く走らせる必要がないと、思ったら、モーターへ電気を、送るのは、止めて下さい。電気を切るときは、最初の、目盛まで、一遍に戻してもかまいません。

今日は、この線路に始めて、電車を走らせるのです。毎日、土木会社の人達が、砂利を搗き固めていますが、充分ではないと思います。それで、速度を上げると、電車の揺れも、大きくなり

ますので、今日は、マスコンの、目盛を二つだけ進めて、その先へは進ませませんから、そのつもりで動かして下さい。それでは、発車します。」

そういつて、石原は、マスコンのハンドルを、一目盛前に進めると、電車のモーターは、音を出し始め、電車は前に進み始めました。電車の速度がだんだん、速くなるに連れて、モーターの発する音も、高くなって来ました。

見習生達は、耳をそばだてて、モーターの音を聞きながら、石原の手元を見ていました。

彼等が、もうこれ以上、音が高くならないだろうと、思ったのに、まだ、石原の左手は、動きませんでした。

すると、モーターの音は、さらに高くなってきました。

見ていた見習生達が、イライラしはじめたころ、ヤット石原の左手が動いて、マスコンのハンドルが、一目盛前に進みました。モーターの音は、急に低くなりました。そして先程と、同じようにだんだん、高くなってきました。

電車も、モーターの音に合わせて、どんどん速くなってきます。石原は、前を見ながら、見習生達に問い掛けました。

「ここで、マスコンのハンドルを、動き出す前の、最初の目盛まで、戻しますが、電車はどうか、思いませんか、この線路は平らです。そのまま走り続けますか、止まりますか、どちらだと思いますか」

これを聞いて、見習生達は、異口同音に、

「すぐ、止まります。」と答えました。石原は、それでは、

「やって、みましょう。」といつて、マスコンのハンドルを、振出しに戻しました。

電車の、速度は少し遅くなったようですが、走り続けて、止まる気配は全くありませんでした。

見習生達は、石原が何もしないのに、電車は、走り続けるのが、なぜなのか納得出来ないという、顔をしていました。

石原は、そんな雰囲気を感じて、電車を運転しながら、話始めました。

「みなさん、モーターに電気を、送らなくても、電車が走っていて、止まらないのは、なぜかお解りにならない、ようですね。

みなさんは、下駄の歯や、靴の踵が、減らないように鋳を打って、それを、履いて、歩いたことはありませんか、それも、鉄板の上を、そのときのことを、思い出して下さい。歩きにくかったのでは、ありませんか。それも滑って、」

見習生達は、この話に納得したようで、お互いに顔を見合わせ、頷きあっていました。石原は続けて、

「そんな鋳の付いた靴や下駄でも、砂利とか板は、普通に歩けたと、思います。それは、例えば、鋳と板が接すると、そこに、引きとめようとする力(摩擦力)が、働くからです。ところが、鋳と、鉄板は、同じ金属なので、そこに発生する摩擦力は小さいのです。お互いが丸ければ、いつまでも、転がっています。」

さらに電車を走らせると、前方に、数人の人の姿が見えてきました。

石原は、右足の脇に、床から出ている、小さな突起を、踏みました。すると警笛がなり、その人達は、こちらを見て、手を上げました。石原は、その人達の傍で、電車を止めました。

そこには、土木会社の社長大川が、部下を二人連れて立っていました。大川は、電車から降りて来た、石原に向かって、

「全線、線路の状態、特にお話のあった、砂利の状態をみて、うまくないと、思った所は、直しておきましたが。」という、石原は、

「御苦労様です。いまから、電車を、走らせますが、このへんが、温泉と、省線の駅の間だと、思いますので、今日は、ここから、温泉のほうで、運転士の訓練を、二台の電車で、行います。

また、明日は、ここから、省線の駅のほうで、電車を、動かしますので、よろしく願います。

今日、明日は、機械の操作が、中心ですので、余り速く走りませんが、明後日からは、速度を上げますので、砂利などは、相当痛むと、思います。」

大川は、

「覚悟はしています。到着くまでは、この二人を、朝から晩まで、この線路の貼付けて置きますから。」といわれ、傍にいた、二人は、石原に、軽く会釈をしました。石原も、

「それでは、よろしく。」といって、手に持っていた、赤い布を巻いた棒を、線路の脇に差して、また、電車に乗りました。

石原は、電車に乗ると、四人の見習生を集めて、

「これから、電車の動かしかたを。覚えてもらいます。この中の二人は、後ろに付いて来た、小野の電車に乗って、これからは小野の指導を、受けて下さい。」といい、小野と二人の、見習生は、後ろの電車に乗る移り、その電車は温泉町のほうに、戻って行きました。

小野の電車が、遠くへ行ってしまうと、石原は、残った二人の見習生に向かって、

「私達も、温泉町に戻りましょう。ここへ来るまで私の、やりかたを、見ていたので、たぶん出来ると思います。どちらでもよいですから、電車を、動かして温泉町に、戻りましょう。」といわれて、二人は顔を見合わせていましたが、やがて、田中が出て来て、温泉町に向いている運転台に、立ちました。それを見て、石原は、

「それでは、田中さん、出発して下さい。」といいました。

言われて、田中は、まず電車を降りて、今度は後ろになる省線の駅のほうに、少し歩き振りかえって、電車のほうに向き、ポールを上げました。そして、そのまま、電車の脇を歩いて、温泉町側に来ると、そちらの、ポールを降ろして、運転台に乗り込み、その真ん中に立ち、温泉町のほうに向き、右手で、ブレーキのハンドルを、緩めました。

そこで、一息ついて、正面を向き、左手で、マスコンのハンドルを、前に押しました。

しかし、そのハンドルは、動きませんでした。さらに力を入れて押しますが、ビクともしませんでした。

それを見て、石原は、

「田中さん、なにかその前に、することが、あるのでは、ありませんか。」と、尋ねました。

しばらく考えていた、田中は、

「アッ。」と、反対側 いままで石原が、運転していた側の、運転台へ、車内を走って行きました。

そして、そのマスコンの上を、見ていましたが、怪訝そうな顔をしていました。

石原は、田中の傍に寄って来ると、ポケットから、Z形の、レバーハンドルを出して、

「私の、説明が不足していたかもしれません。このハンドルは、これが付いている位置から見て、この電車は前に行くのか、後ろに行くのか、ここでは運転しないのかを指定する、重要な鍵なのです。この鍵の判断によって、電車は、前にも、後ろにも走ります。それで、逆転器ともいいます。」

石原は、続けます。

「そんな、大事な鍵ですから、運転士は、運転台を離れるときは、『中』の、抜取り位置で、必ず抜取って、持っていて下さい。そして、引継ぐときは、次の運転士に、マスコンから、必ず抜取って、あとは、よろしく頼むよと、意味も込めて渡して下さい。」と、田中に、レバーハンドルを、渡しました。

石原は、

「こんどは、大丈夫ですね。それでは、温泉町に、向かって出発しましょう。」といわれ、

田中は、レバーハンドルを、マスコンの右側の、頂部にある、受け口に、差込み、前に押ししました。

そして、一息つくと、左手で、マスコンのハンドルを、前に押して、一目盛進めました。

電車の、モーターは、音を出して回転し始め、電車は動き始めました。田中は、

「シテ、ヤツタリ。」という顔をして、「ニヤリ。」としましたが。電車はだんだん、速くなるので、不安になったのか、顔は、青くなってきました。いままで、経験した、速い乗り物は、自転車ですから、無理もありません。

それに、気が付いたのか、石原は、ただ一言、

「まだ、電気は切っては、いけません。」と、いいました。

田中は、こんどは真っ赤な顔になり、汗をかき始めました。

やがて前方に、先に走っていった、小野の電車が見えてきました。

そして電車の後ろで、誰かが、赤旗を振っているのが、見えて来ました。

やっと、石原は、

「田中さん、マスコンのハンドルを、戻して、ブレーキハンドルを巻いて、電車を止めて下さい。」といました。

田中は、ホットして、すぐに、マスコンのハンドルを、戻して、ブレーキハンドルを、巻き始めました。

この、ブレーキハンドルが、練習したときは、簡単に巻くことが出来たのですが、走っている車輪を、締め付けるので、重くて、なかなか、ハンドルが回せませんでした。ともすると、戻りそうになって、しまうのです。

これを、見ていた、もう一人の見習生島田は、
「応援してあげなさい。」と、石原にいわれて、二人で、ブレーキのハンドルを、廻し始めました。

初めのうちは戻るのが、食い止めるのが、精一杯でしたが、やがて少しづつ、スピードが落ちてくると、だんだんハンドルが、軽くなり、スピードは、どんどん落ちてきました。

そして、ガクンと、音を出して、電車は止まりました。そのとき二人は、前にのめりそうになりました。

外を見ると、その場所は、赤い旗が振られていたところよりも、だいぶ手前でした。

石原は、電車から降りていって、その線の脇にも、赤い布を巻いた、棒を線の脇にさしました。

よく見ると、小野の電車の脇にも、同じような、赤い布を巻いた、棒が差してありました。

石原は、二人の見習生に向かって、

「私達は、この赤い旗と、さっき行ったところに、差してきた、赤い旗の間で、電車の動かし方、止め方を、練習します。一人で、行きと帰りを、運転して下さい。行くときの上り坂は、帰りには、下り坂になりますから、上り坂と下り坂で、電車はどう違うのか、そのときどうすればいいのか。勉強して下さい。

また走っているとき、モーターに送る電気を切ると、電車はどうなるのか、目標に合わせて止めるには、どの辺からブレーキのハンドルを、廻し始めたらいいのかなど、シッカリ覚えて下さい。

それでは、田中さん、また戻りましょう。」といわれ、田中は電車から降りて、ポールを上げ、下げしてから、省線の方に駅に向いている、運転台に移動しました。

そして、忘れずに持ってきた、レバーハンドルを、マスコンの右側にセットし、前を睨んで、一息入れました。

しばらく前を睨んでいましたが、やがてマスコンのハンドルを、一目盛進めました。電気が送られたモーターは、音を出して回転を始め、電車は前に進み始めました。見ていた、石原は、田

中の後ろから、

「モーターの音をよく聞いて、次の二番目の目盛まで、ハンドルを、動かして下さい。そして私が、いいと思ったら、モーターに、送る電気を切って、ブレーキのハンドルを、廻して電車を止めて下さい。」といいました。

「それと、大切なことですが、電車は、線路上だけしか走れません。線路上に、邪魔物や、障害物があっても、自転車や人力車のように、よけて通ることは、出来ません、だからその手前まで、止まらなければいけません。ですからこれらを、早く発見するためにも、いつも前を見ていなければ、いけません。」と、石原はいいました。

このあたりは、田んぼの中なので、踏切はあっても、田んぼの仕事をする人以外は、ほとんど通りません。

学校が終われば、電車の走っている音を聞き付けて、子供達が見にくると思われるので、旅館組合からは見物してまよいが、線路内には、絶対に、立入らないことと、通知が出ていて、さらに、その時間帯には、旅館組合から小僧さん達が交代で、見まわりに来ると、いうことになっていました。

モーターの音を、聞いていた田中の左手が動いて、マスコンのハンドルが、一目盛進みました。

その、瞬間大きな音がして、電車のスピードが、落ちました。モーターに電気が送られなくなり、モーターが、回転することを、止めてしまったのです。

モーターが次の段階で回転する、準備が、まだ出来ていなくて、電気が流れ来るのを、拒否したのです。

石原は、田中と、島田に向かって、

「まだ、次に進むのが早かったようですね。モーターの音がこれ以上は、高くなることが、出来ないと思われるまで、我慢して下さい。では、田中さん、左のハンドルを、最初の位置に戻して、最初から始めて下さい。」そのころには、電車は、止まりそうに、なっていました。

今度は、田中は意地になって、マスコンのハンドルを、なかなか、前に進めませんでした。前をジット見つめていました。やっと、マスコンのハンドルを、一目盛前に、進めました。今度は、すぐにモーターに、電気が流れいき、電車は前にも増して、速く走っていきます。

一旦低くなった、モーターの回転音も、まただんだんと、高くなってきました。

田中は前を、睨んだまま、右手はブレーキのハンドル、左手はマスコンのハンドを、シッカリ握っていて、いつ石原から、止めるように指示があっても、直ぐに対応できるように、準備していました。しかし、石原からは、なにも指示が出ません。電車はどんどん速くなる、ばかりです。

また顔色は、青くなって来ました。

やっと、石原から、声がかかりました。

「田中さん、電車を止めましょう。どのへんで、電車が動かなくなるか、見当を付けて下さい。島田さん、田中さんが、ブレーキのハンドルを、廻し始めたら、線路の脇に立っている、電柱を数えて下さい、電柱を物差しの代わりにしますから。」と、いわれ、田中は、ホットして、マスコンのハンドルを戻し、ブレーキのハンドルを、廻し始めました。やはり、前回と同じように、戻されそうになりました。

今度は、田中が一人で頑張って、電車を止めることが、出来ました。

田中は、レバーハンドルを、『中』位置に移動させ、これを抜散り、ポケットに入れると、電車から降りて、後ろへ行き、ポールを、降ろして車内に戻って来ました。

車内にいた、島田は立ちあがって、戻って来た田中から、レバーハンドルを、受取り、反対側の、運転台に行こうとしました。そのとき、石原が島田に声をかけました。

「島田さん、ちょっと待って下さい。田中さんに、電車を動かした感想を、聞きますから。」そして、田中に、尋ねました。

「田中さん、初めて電車を動かしてどうでしたか。電車がだんだん速くなってきても、怖くなかったですか。ブレーキのハンドルを、廻し始めたときに、電車は止まると、思いましたか、ハンドルを回し始めたとき、重かったと、思います。そして、止まるのに、長い時間と距離が必要でしたね。いいかえれば、電車は止まるためには、長い距離が、必要なのです。これから毎日、これらのことを、考えながら、お客さんに、知らせた時間内で走り、お客さんが望む所に、ピタリと、揺れも少なく止めることが出来るように、シッカリ練習しましょう。

それでは、島田さん、出発しましょう。」と、島田を、促しました。

運転台の位置を変え、準備が終わった島田は、右足の脇に出ている、金属の突起を踏み、警笛を一回鳴らして、電車を動かし始めました。マスコンの二番目の目盛も、電気が切れることもなく、そのまま電気が、流れていき、電車は、ますます速く走り出しました。

これを見て、石原は直ぐに、

「私が、いいというまでは、マスコンのハンドルは、いじらないで下さい。」と、島田にいいました。

島田は、先程の田中と同じように、石原から、声がかかるのを、待ちました。

モーターの回転する音はどんどん、高くなります。島田は、顔を真っ赤にして、冷や汗をかき始めました。

モーターの音が最高になり、これ以上無理だと、思われたときになって、やっと、石原は、口を開いて、

「島田さん、マスコンの、ハンドルを戻して下さい。そして、ブレーキの、ハンドルを廻して、電車を止めて下さい。」といいました。

島田は、待ってましたとばかりに、マスコンのハンドルを、最初に位置に戻し、ブレーキのハンドルを、廻し始めましたが、重くて、戻りそうになるのは、田中のときと、同様でした。それでもそのうちに、電車はだんだん遅くなり、やっと止まりました。しかし、止まったとき、電車は「ガクン」と揺れて、島田は倒れそうになり、慌ててマスコンのハンドルに、しがみつきました。

その様子を見ていた、石原は、

「島田さん、マスコンのハンドルが、動かなかったから、よかったです、もし動いたら電車は、止まるどころか、走り出していた、かも知れませんね。

電車を止めるときは、モーターに電気を、送る必要はないのですから、マスコンのハンドルを、最初の位置に戻すだけでなく、レバーハンドルを、『中』の位置に戻しておけば、マスコンのハンドルは動きませんから、しがみついても、大丈夫です。

電車のモーターに、電気をおくることを、『力行』(りきこう)といい、送らないで、ダラダラ走っていることを、『惰行』といいます、惰行するときには、マスコンのハンドルを、戻したら、すぐに、レバーハンドルも、『中』に戻して下さい。

そうすれば、電車が走り出す心配は、全く無くなるので、左手は、仕事が無くなるので、両手で、ブレーキのハンドルを廻すことができます。手の仕事は変わっても、目はズット前方を、見ていて下さい。

それと、電車がいよいよ、これで、止まるというときは、ブレーキのハンドルを、ほんの少し緩めて下さい。すると、止まったときの揺れ方が、小さくなり転びにくくなりますから、ただその分だけ、電車は、前に進みます。

これは、お客さんが、多い時、少ない時で、違います。まず、目指した位置に、出来るだけ、静かに止められように、練習して下さい。

それと、もう一つ、ポールは後ろになるのを上げて、電車は走ります。それで、ポールを、上げたり、降ろしたりするのは、後ろに乗っている、車掌さんの仕事です。いまは、みなさんは、運転士の仕事をしていて、車掌さんはいません。それで、運転しない人は、車掌さんになって、ポールの上げ下げをして下さい。ポールの上げ下げが終わったら、前に来て、自分が、運転士になったつもりで、見ていて下さい。」と、いいました。そして、

「それでは、いま島田さんが、運転士ですから、田中さんは、車掌さんになって、ポールをもう一度上げて、電車が動いてもよいのなら、この紐を引いて下さい。」と、電車に乗ったり、降りたりする、ステップの上から、下がっている紐を、引いて見せました。

すると、運転士の頭の上で、「チン」と、鳴りました。

電車は島田に運転され、省線の駅の方に、また向かいました。

そして、土木会社の大川と会ったところの、線路脇に石原が差した、赤い布が見えて来ると、石原は、

「あの、赤い布の傍に、電車を止めて下さい。」と、いいました。

これを、聞いた島田は、すぐに、マスコンのハンドルを、最初の位置に戻して、レバーハンドルを、『中』位置に戻しました。

石原が、島田に声を掛けたときは、まだマスコンのハンドルは、二番目の、目盛まで進んでいませんでした。

そのときに、モーターに、電気が送られなくなって、しまったので、すぐに、電車のスピードは、落ち始めました。

さらに、ブレーキのハンドルを、廻したので、電車はすぐに、止まってしまいました。

その場所は、赤い布のついた、棒があるところよりも、だいぶ手前でした。石原は、二人に向かって、

「なぜこんなところで、止まってしまったか、お解りだと、思います。自転車で考えてみましょう。」

自転車が、走り始めるときは、一生懸命、ペダルを踏みます。電車は、モーターに電気を、送ります。すると、どちらも、だんだんスピードが速くなって来ます。自転車は、疲れてくると、ペダルを動かすのを、止めますが、電車は、機械ですので、疲れれることは、知りません。マスコンのハンドルを、進めれば、進めるだけ速く、走ります。

自転車の場合は、このくらいの速さが、適当と思うと、ペダルを踏むことを、止めます。電車も、同じように、モーターに電気を、送ることを、止めれば、適当な速さを、維持することが出来ます。それは、マスコンのハンドルを、最初に位置に戻すことで、可能になります。

自転車で、ペダルを踏むのを、止めたときの、速さが、遅い場合は、すぐに止まってしまいます。いま川島さんが、運転したときに、電車が、すぐに止まったのは、このような状態だったと、思います。

もっと先で、電車は、止まってもらいたかったのです。ここまで、お話すれば、目標の手前で、止まったわけが、解ると、思います。

もっと長い時間、モーターに電気を、送ってあげなければ、いけません。マスコンのハンドルを、一番目、二番目、三番目と移動させて、四番目の目盛まで、動かしていく必要があります。そのときの、電車の速度は、自転車とは、比べものに、ならないくらい、速くなります。ものすごく、怖いと思います。いつかは、止めなければならないので、動かしている、ほうは、この速度では、止まることが、出来ないだろうと、不安になります。

次に、走っている、電車を、止める方法について、お話します。自転車のときは、止める目的地が見えてきたら、そこからの、距離に応じて、することが、いろいろ違いますね。

- 1、まだ遠いから、ペダルを、踏み続ける。
- 2、もうすぐ、止まるために、ブレーキをかけるから、速度を、落したほうが、あとが楽だ

から、ペダルを踏むのを止める。(これを、惰行運転といいます。)

3、もうブレーキを、かけないと、間に合わないから、ペダルを踏むのを、止めて、すぐにブレーキをかける。

4、すぐに、ブレーキを、かけても、間に合わないから、ペダルを踏むのを止めることは、もちろん、急ブレーキを掛けて、自転車から、飛降りる、などが、考えられますね。

これらの、方法で、最も良い方法は、二番目だと思いますが、このためには、マスコンのハンドルの目盛を進めるところ、マスコンのハンドルを、最初の位置に戻すところ、ブレーキのハンドルを、廻し始めるところ、などを決める必要があります。

さいわい、二台の電車は、少し姿や形は違いますが、性能は全く同じです。

今日は、私はいろいろなことを、沢山話しましたので、忘れないうちに、私が、朝から話したことを順番に、ノートに書き出して、みて下さい。このへんで、何か聞いたような気がしたなど、いうところもあると、思います。そこは、白紙で、結構です。書かないで置いて、後で思いだしたら、書き込んで下さい。

どうしても、思い出せなかったら、お互いに聞くなり、私に聞くなりして、白紙のない、ノートにして下さい。

もちろん、ノートに書くためために、電車を、外から見たり、床下を、見たりすることは、かまいませんから、そして、終わったら、私に、教えて下さい。」と、やっと石原の、長い話は終わりました。

そのとき、電車の止まる音がして、やがて、車両会社の小野と、見習生の、山川と川田が、こっちの電車に、乗って来ました。小野は、連れて来た二人に向かって、

「君達も、この二人に、見習って、私が教えたことを、ノートに、整理して書いて見て下さい。そして、忘れたことなどは、お互いに、教えてもらいなさい。」といいわれ、二人は仲間に入りました。

ときおり、四人とも、首をかしげ、石原や、小野に助けを、求めていました。

あくる日は、石原と土木会社の社長との約束通り、温泉町と省線の駅との、真ん中から、省線の駅までの間で、練習が、行われました。

その区間を、さらに半分にして(区域)、温泉町寄りを、小野が指導する、山川と川田が、省線の駅寄り、石原が指導する、田中と島田が、電車を動かすことになりました。

その区間の、出発点と終着点、そして区域の境には、50mほど離れて、赤い布を巻いた棒が、線路脇の二ヶ所に建てることになりました。

お互いに、ここから先には、行ってはいけないという、目印でした。

今日は、小野が山川と川田の二人を乗せて、先に出発することに、しました。

出発前に、小野は二人に、ジャンケンをさせ、どちらが、先に運転士の仕事をするのか、決めさせました。

ジャンケンに、勝った川田が、先に運転士を、することになりました。そこで、小野は四人に向かって、

「後から、出発する電車は、昨日帰りは、並んで帰って来ましたが、あれは、いいことでは、ありません。今日は私達が、出発してから、五分以上たってから、発車して下さい(隔時法といいます)。ということは、先に走っていった電車が、なんかの事情で、例えば故障などで、予定外のところで、止まってしまった場合(不時の停車)、後から来る電車の、運転士が気付くのが遅ければ、自分の電車を止めるのが、遅れ追突してしまいます。

このようなことが、起きないように、こんなときには車掌は、自分の電車の運転士に断わり、赤い旗を振りながら、後ろへ走って行って、後の電車の運転士の知らせ、その電車を、止めてもらうという、大事な仕事をでてきます。(後方防護)

そして、電車が止まったのを、確認したら、前の電車の車掌は、この先で自分の電車が、止まっていることを、後ろの電車の、運転士に伝え、自分の電車に戻って行き、自分の電車の運転士に、戻って来たことを、報告して下さい。

前の電車の、運転士は故障が直ったとしても、車掌が戻って来るまでは、電車を動かしては、いけません。

一方、後から走って行く、電車の運転士は、先に走っていった電車が途中で故障などで、止まっているかもしれないと、いつも予期して、運転して下さい。後ろから走る電車の、運転士は目の前に、この札を出して、運転して下さい。」と、短冊形の白い木の札を出しました。

それには、赤い字で、『先行列車アリ』と、書いてありました。そして、小野は、
「今日これから、後で発車する、運転士さんに、この札を、見やすいところに、掛けて運転をして、もらいます。」と、一枚を、石原組に一人に渡しました。

「また、車掌さんにも、」と、出した札には、『後続列車アリ』と、書いてありました。

小野は、石原組の、三人に向かって、

「私達は、これから出発します。八時三十分に発車しますから、八時三十五分になったら、出発して下さい。途中昨日使った赤い旗は、途中の三本は、抜いて行きます。四本目を過ぎた所で、止まっていますから。」と、いいました。

石原組の三人が、降りて行くと、小野は、二人見習生に向かって、

「まず、今日は、さっき、決めたように、運転士は川田さん、車掌は山川さんにやってもらいます。発車時間の八時三十分までは、時間が充分にありますから、それぞれ、発車の準備をして下さい。」と、準備を始めさせました。

しばらくして、小野が二人に確認すると、二人は、

「準備が出来ました。出発できます。」と、答えました。

小野は、運転士の川田に向かって、

「まず最初の旗の、そばで止めて下さい。あの旗を抜いて行きますから、旗は分岐点を通過したすぐ先にあります。モーターに電気を送って、電車が動き出したら、すぐに電気を送るのを止めて、すぐに、ブレーキのハンドルを廻し始めるか、少し惰行させてから、ブレーキのハンドルを、廻すか、どちらにするかは、まかせます。いずれにしても、なるべく赤い旗の近くに、止めて下さい。

それと、もう一つ、分岐点、合流点では、モーターに、電気を送ることは、止めて下さい。」と、いいました。

そして、時計を見ていた小野は、

「時間になりました。出発しましょう。右足で、警笛を一回鳴らして、出発して下さい。」といわれて、川田は、右足の前に床から出ている釘を、踏みました。電車の警笛は、

「チン」と鳴り、小野は、マスコンのハンドルを、一目盛動かしましたが、車庫から出て来た隣の線路との、合流点、続いて、駅から来る線路との合流点があったので、すぐに戻しました

電車は二つの、合流点を、通過しました。川田は、マスコンのハンドルは、動かさないで、しばらく前を見ていましたが、ブレーキのハンドルを、廻し始めました。

廻し始めたときの、電車の速度(制動初速度)が、遅かったので、電車の速度はどんどん遅くなり、赤い旗の、はるか手前で、電車は止まってしまいそうになりました。

そこで、川田は、マスコンのハンドルを、一目盛移動させ、モーターに電気を送り、電車の速度を上げ、すぐに電気を、送ることを、止めました。そして、また、目標の赤い旗を、睨んでいました。そして、しばらくたつと、ブレーキのハンドルを、廻し始めました。

こんどは、ただ廻すだけではなく、電車の速度と、目標の赤い旗の位置とを、見比べながら、廻していきました。それでも、止まったところは、やはり手前でした。川田は、赤い顔をして、舌をペロリ出しました。

小野は、川田に向かって、「もし赤い旗の先に線路がなかったら、大変なことになりますよ。電車は、線路から外れて、線路の上に戻すには、いまここにいる、四人だけでは、なにもできませんから。これからも、止めるときは、目標の先まで行かないで下さい。」とって、降りていき、赤い旗を、抜いて来ました。そして、川田に向かって、

「こんどは、二番目の旗のところまで、走ります。そこは、昨日私達の終点でした。近くになれば、場所はわかると思います。その旗の、なるべく近いところへ、止めて下さい。ただ、今度は条件があります。それは、電車を動かすマスコンのハンドルは、二つ進めた、三番目の目盛で止めて、その先へは、進段させないで下さい。

線路の状態は、線路もその下の砂利も、見た目では平らですけれども、隙間だらけのはずです。それを、電車を走らせることで、踏み固めて行くのです。いまの段階では、相当揺れると思います。」

「おそらく、そのときの、速度はいままで、経験していない速さだと、思います。怖くなると思います。うまく止まるだろうかと、心配になると、思います。」

その怖さを、我慢して、克服してもらいたのです。私がいいというまでは、マスコンのハンドルは、戻さないで下さい。

それでは、出発しましょう。」といわれて、川田は、電車を、出発させました。

マスコンのハンドルの、二段目の移動も、モーターが発する音を、見極めてうまく、移動しました。

電車は、ドンドン速く走って行きます。運転している川田は、顔を真っ赤にして、前を睨んでいます。

はるか遠くに、赤い旗が見えて来ました。川田は、

「フッ。」と溜息をつき、小野のほうを、チラッと見ましたが、小野はなにもいいませんでした。

モーターに、電気を、送られている電車は、ますます速く走り、それにつれて、揺れも激しくな
って、来ました。

やっと、小野が口を開きました。

「このへんで、マスコンのハンドルを、最初の位置に戻して(オフにして)、レバーハンドル
を『前』位置に戻して下さい

そして、電車がどうなるのか、様子を見ましょう。ブレーキのハンドルには、まだ障らないで
下さい。」というのと、

待っていた川田は、早速そのとうりにしました。

小野は、

「しばらく、この状態で、電車を走らせて下さい。惰行運転をします。いま自転車では、ペタ
ルを踏んでないのと、同じ状態です。電車の速度がどうなるのか、よく観察して下さい。」とい
いました。

三人は、しばらく電車の様子を、見ていました。すると小野が、口を開いて、

「自転車の場合は、坂道を下っているときで、なければ、ペダルを踏むのを止めると、すぐに速
度は、落ちて来ます。

だが、電車は走っている線路が平らならば、速度はすぐには落ちません。

それに、モーターに送る電気を、止めたとき、マスコンのハンドルを、オフにしたときの、速
度が、高いほど、その速度は落ちにくいのです。これは、これから先経験すると、思います。」

つづけて、小野は、

「川田さん、目標の赤い旗が、だいぶ近くなってきたので、あの旗の傍にこの電車を、止めて下
さい。あの旗を見ながら、ブレーキのハンドルを廻して、速度を調節しながら、そして、最後は
、車内で立っている人は、倒れないように、静かに止めて下さい。」と言いました。

いわれた、川田は、すぐにブレーキのハンドルを廻して、電車の速度を、落しました。

これ以上、ハンドルを廻し続けると、電車が止まってしまうと、思われたとき、廻すのを、止
めました。

電車は、ユックリと、走り続けました。そして、赤い旗の手前まで来ると、ブレーキのハンド
ルを急いで廻し、電車は止まりました。そのとき、電車は、ガクンと揺れて、他の二人は、よろ

めきました。

小野は、電車を降りて、線路脇にあった赤い旗を、抜いてくると、二人に向かって、
「これから、毎日、電車の運転の、練習の様子を、ノートに書いて、帰るときに私達に見せて下さい。」

まず、最初は、月・日・曜日・天気。仕事を始めた時間、終わった時間、どんなことをしたか、うまくできたこと、できなかったこと、失敗したこと、それは、どうしてか。わからないこと、などを、書いて下さい。」

「それでは、川田さん、次の旗は近いですから、うまく止めて下さい。」と小野は、川田にいいました。

いわれて、川田は、マスコンのハンドルを、動かし、電車は動き出しました。

川田はすぐに、マスコンのハンドルを、オフにして、電車をユックリ走らせました。

そして、赤い旗を、睨みながら、ブレーキのハンドルを、廻して、さっきよりも、遅く電車を、ダラダラ走らせ、ここだというところに来たときに、ブレーキのハンドルを、さらに廻しました。電車は止まりましたが、その衝撃は変わりませんでした。小野は川田に、

「川田さん、電車は、自転車と、同じですよ。いよいよ止まるという、最後になったときに、ブレーキを緩めませんか。そうすることによって、止まったときに衝撃はなく、静かに止まることが、出来るはずですが、お客さん達にとっても、乗り心地がいいはずですよ。ただこの方法をとると、止まる位置は、それだけ、先になりますから、これを、計算して、ブレーキのハンドルを、廻し始める場所を手前に、したほうがよいと思いますが。」

といって、小野は、赤い旗を抜いて来ると、二人に向かって、

「ここで、交代しましょう。今度は山川さん、あなたが、運転して下さい。川田さんは、車掌になって下さい。ただ、いまは、お客さんが、いないので、後ろで、発車合図の、紐を引いて、電車が走り出したら、すぐに前に来て、自分も、運転しているつもりになって、山川さんの仕事を、見ていて下さい。」

「山川さん、マスコンのハンドルは、さっきと同じように、二番目の目盛まで、移動させますが、私がいいというまでは、戻さないで下さい。明日からは、四番目の目盛まで、移動してもらいますから、今日の速度は、今日中に慣れて下さい。怖いと思わなくなるように、なって下さい。それでは、発車しましょう。」といわれて、山川は、運転を始めました。

マスコンの二段目から三段目への切り替えも、モーターの音が、これでもか、これでもかと、高くなるのを、辛抱して待ったかいたがあって、スムーズに行きました。

「そのまま。」といって、小野は前方を睨んでいました。

赤い旗が見えると、

「オフ。モーターへの、送電を止めて下さい。」といわれ、山川は、マスコンのハンドルを、最初の位置に、戻しました。

「すぐに、ブレーキのハンドルを、廻さずに、このまま、惰行運転を、続けて下さい。そのうちに、速度は落ちてきますが、このままで、どのへんまで走るか、試してみましよう。」といいました。

電車の速度はなかなか、落ちません。どこまでも、どこまでも、走っていきそうです。小野は

「このまま、電車に任せましょう。」といいました。

それでも、しばらく走っていると、速度が少しずつ、落ちてくるのが、わかるように、なってきました。

さらに、落ちてくると、遅くなるのが、ハッキリわかるように、なってきました。小野は、「電車が、止まるまで、待ちましょう。自転車でいえば、ペダルを踏むのを止めたのと、同じですが、そのあと自転車が、走る距離と、電車が走る距離を、比べてみると、電車は、はるかに、長い距離を走ります。

同じように、動く機械でも、同じところもあるし、違うところもあります。これをハッキリ、認識して下さい。」といい、

「山川さん、完全に止まったので、赤い旗は、すぐそこですから、電車を動かして、なるべく近いところに、静かにとめて下さい。」といいました。

いわれて、山川は、マスコンを、一段目まで動かし、すぐにオフにして、ブレーキハンドルを廻して、もう止まると思われる寸前で、少し緩めました。電車は、ソロソロと少し速く走り、始めました。

赤い旗が、目の前にきたとき、ブレーキハンドルを廻し、ブレーキを完全に閉め、電車を止めました。

そときの、衝撃も、少なかったようです。止まった位置も、いままでより、目印の赤い旗に、近かったようです。

小野は、

「山川さん、この旗の先へ電車を進めて下さい。そして、二つ目の電柱を、通り越したら電車を止めて下さい。

そこで、あとから来る電車を、待ちますから。あとから来る電車は、約五分後に来るはずですから。それでは、出発しましょう。」といわれ、川田は電車を動かして、いわれたところで、止めました。

電車が止まると、車掌の川田は、運転士の山川に断わり、電車から降りて、赤い旗を掲げながら、後ろへ、歩いて行きました。

やがて、あとから、温泉町の車庫を出発した、石原組の電車がやって来ました。

川田が、持っていた赤い旗のそばで、電車を止めると、その電車に乗っていた三人が降りて来て、川田と四人になって、こっちの電車にやってくる来ました。待っていた小野が、

「私達はこれから、電車を、省線の駅に向かって電車を走らせ、途中この赤い旗を二本、50 m 離れて立ながら行きます。私達はその先で、練習します。石原さん達は、手前の二本の、赤い旗の中で練習して下さい。」といました。

そして、小野は、山川と川田を連れて、

「それでは、お先に。」と言って、電車に乗り、

「山川さん、また運転して下さい。電車を止める場所が近付いたら、教えますから。それまでは、マスコンのハンドルはオフに、しないで下さい。それでは、出発しましょう。」といました。

こんども、マスコンのハンドルの、進段はスムーズに、いきました。 電車の速度はどんどん上がって行きます。小野は、山川に向かって、

「しばらく、この速度を維持して、いきましょう。」とって、先程と同じように、前方を睨んでいました。 やがて、口を開くと、いま通り過ぎた電柱を、指差して、
「次の電柱から、三本目の電柱の脇で、止めて下さい。」とていきました。

これを聞いて、運転していた山川は、もちろんのこと、傍で見ていた川田も、ビックリしました。

いま電車が走っている、速度では、ブレーキのハンドルを、どんどん廻しても、いわれた電柱の位置までで、電車を止めることは、とうてい無理だと、思われたからです。

この雰囲気、察した小野は、
「無理かもしれませんが、どんな結果にんるか、やってみましょう。」とてい、
山川は、マスコンを、オフにして、レバーハンドルを、『中』位置に移動させ、ブレーキのハンドルを、廻し始めました。

ブレーキのハンドルを、廻すに従って、電車の速度は、落ちて来ましたが、指示された、電柱を通り過ぎてても、止まらずに、走り続けました。

ようやく、大きな衝撃と共に止まったときには、さらに何本かの、電柱を、通り過ぎていました。

小野は、二人に向かって、
「自転車も、速度が高いときには、強くブレーキのハンドルを、握っても、すぐには止まりません。そして、最後までハンドルを、握っていると、止まったときに、衝撃が起きます。

電車は自転車に比べると、大きいし、重いのです。それだけに、ブレーキをかけたときに、止まるまでの距離、これを制動距離といいますが、長く、止まったときの衝撃も、大きいのです。

電車は、線路上に邪魔物があっても、これをよけることができません。まず早く発見することです。そして人間ならば、警笛を鳴らして、どいてもらうことです。それが、出来ない場合は、こちらの電車を、止めなければなりません。ブレーキを、操作して、電車を止めますが、いま、みなさんが体験したように、電車が止まった瞬間に、衝撃が発生して、お客さんが、転ぶ恐れがあります。そうならないように、車掌と協力して、お客さんに手近かな棒などに、つかまってもらうように、教えてあげなければ、なりません。」

小野は、話終わると、さらに続けて、

「ちょうど、ここに踏切があります。この踏切を挟んで、50m位離して、この赤い旗を二本立てて、練習する区域の境にします。私達が今日練習する区域は、踏切の先に立てる赤い旗から、省線の駅の手前までです。

ここで、一本立てたら、私達は踏切の先まで行って、赤い旗を立てて、その先で後からくる電車を待ちましょう。

それでは、運転士は交代して、川田さん、ここで私が赤い旗を立てたら、電車を動かし、50m位進んだと、思うところに、電車を止めて下さい。」と、いいました。

川田が、指示された場所で、電車を止めて、待っていると、やがて、温泉町のほうから、後の電車が走って来て、赤い旗の手前で止まり、その電車から、石原組三人が、降りて来ました。

そこで、六人は、今日の練習する区域の、確認をしました。

いま、踏切を挟んで立っている、赤い旗から、省線の駅寄りには小野組が使い、もう一本の赤い旗から、温泉町寄りを、石原組が使うと、いうことに決めました。

そして、お互いが衝突しないように、踏切を挟んだ赤い旗から、踏切側には、どちらも入って来てはいけないと。決めました。あとは、決めた区域内で、それぞれ自由に、練習すること、夕方帰るときは、またここに、集まって帰ることにしました。

小野は二人を連れて、電車に戻ると、

「川田さん、ここから、省線の湯ノ津の駅前に向かうと、その駅の手前に大きなカーブがあります。そのカーブの手前までが、今日の私達の、練習区域です。ここから電車を、そこまで走らせて下さい。ただその場所には、まだ、目印は何もありませんから、そのへんの電柱をとりあえず代用にしましょう。」

「さっき、マスコンのハンドルを、オフにして、電車が走るままに、まかせて走りましたね。こんどもその方法で、運転して見て下さい。もしこれがうまくいけば、ブレーキのハンドルを、廻さなくて済みます。とても楽な運転方法なのですが、

目標が、漠然としていて、難しいと思いますが、挑戦してみてください。それでは、出発しましょう。」といいました。

川田は電車を、動かし始めました。電車の速度が、上がってきても、さきほどよりも、落ち着いているようでした。

やがて、カーブに入口が見えて来ると、マスコンのハンドルを、オフにして、レバーハンドルは、『中』位置に戻して、あとは、電車にまかせました。車内は、車輪が、線路の継ぎ目を通る

とき、発する、「ゴトン、ゴトン」という、音だけが聞こえていました。

カーブがだんだん近付いてきて、ハッキリ解って来ると、惰行運転にしたときに比べて、速度が、遅くなって来たとはいえ、どうも、カーブの手前では、止まりそうではないようでした。川田は慌てて、ブレーキハンドルを、廻そうとしましたが、
「川田さん、電車に任せましょう。」小野にいわれ、小野は廻すのを止めました。

電車は、ユックリと、カーブを走っていき、電車の走る方向が、北から西に、九十度方向を変えたところで、止まりました。

小野は、川田に向かって、

「川田さん、ブレーキを使わないでも、電車が止まる。これは、大変なことです。自転車は、速度が遅くなると、止まる前に、転んでしまいますが、それともう一つ、カーブを曲がるときは、自転車は速度を落します。電車も同じです。いまは別の目的、電車を止めるために、速度を落したのですが、これがカーブを曲がるために速度を落すことにも、なっていました。二つ目的があるのに、仕事は、一つで済んでしまいました。このように、一つの仕事で、二つ以上の目的が、達成できることもあります。」

そして、山川に向かって、小野は、

「それでは、交代して電車カーブの手前まで戻して、下さい。」といわれ、山川は電車を移動させ、小野は降りて行って、そこに赤い旗を立てました。

そこで、小野は、二人に向かって、

「これから、さっきこちらから行って、踏切の手前にある赤い旗までの間で、練習します。二人で交代で、練習して下さい。ここから電車を動かして、どこでマスコンのハンドルをオフにして、あとは惰行運転をした場合、ある場所に来たら、ブレーキのハンドルをうまく操作して、目的の赤い旗のところで、静かに止まるか、その場所を捜して下さい。」

さらに、小野は続けて、

「ただこの話は、明日以後のことに、しましょう。まだマスコンにも、ブレーキにも、慣れていないのですから、今日は、マスコンや、ブレーキが、自分で思うように、操作出来るように、練習して下さい。あとは、自分で考えながら、解らないことがあったら、尋ねて下さい。」

電柱には、温泉町から順番に、番号が書いてあります。またその間隔は、直線区間ならほぼ一定で、50m位です。また、線路の脇には、やはり温泉町を、起点にして、100mごとに、距離標が立っています。これらを参考にして、マスコンをオフにする地点、ブレーキをかけ始め地点を、捜し出して下さい。」といました。

さらに、小野は続けて、

「いまの話は、明日からのことにします。 まだ、マスコンも、ブレーキにも、慣れていないのですから、今日は、マスコンや、ブレーキに慣れて下さい。自分で思うように、操作できるように練習して下さい。わからないことが、あったら尋ねて下さい。

これからは、みんなで仕事の、順番を決めて、自分でいまどうすればよいか、考えながら練習して下さい。」と、二人に任せました。

夕方になると、マスコンの進段も、電車も、静かに止まるようになりましたが、止まったときの位置は、目標の赤旗には、なかなか合いませんでした。

翌朝からは、土木会社の社長の太田から、線路の整備は全線で終わったとの、連絡もあったので、電車が出せる最高速度、マスコンのハンドルは四段目まで進めて、区間を区切らずに、全線通して練習を行うことになりました。

ただ、まだ電車が止まるとき、目標とズレが、生じているので、駅には入らずに、その手前までとしました。

また一本の線路を、二台の電車が行ったり、来たりするので、衝突や、追突の恐れもあるので、先の電車が、出発したら、後の電車は五分後に発車すること、先の電車が不時の停車をしたら、車掌は、後から来る電車に、自分の電車が止まっていることを、知らせることにして、

それぞれの、練習で、最後に止まる位置にする目標の旗は、50m以上ズラすことに、しました。

今日先に行くのは、石原組です。まず田中がマスコンのハンドルを、握りました。

マスコンのハンドルを、四段目まで、進段させると、電車の速度は昨日の倍以上になります。全く経験していない速度です。モーターの音を聞いていた、石原は、これ以上高くないだろうと、思われたとき、田中にむかって、

「オフ、これから惰行運転をします。あとは、電車に任せましょう。」といわれ、田中はマスコンのハンドルを戻し、レバーハンドルも、『中』位置に戻し、ホットしたような、顔をしました。

マスコンのハンドルを『オフ』にしたときの、電車の速度が高かったので、電車の速度は、な

かなか落ちませんでした。

小さい山などは、乗り越えて走っていきました。

それでも、しばらく走っているうちに、電車の速度が落ちてくるのが、わかるようになってきました。

すると、石原は、田中に向かって、

「もう一度、マスコンのハンドルを、動かしてモーターに電気を、送って下さい。すぐに二段目まで、ハンドルを持っていても大丈夫ですから。」といわれ、そのようにしました。

すると、電車のモーターが大きな音を出して、電車は生き返ったように、走り始めました。速度はどんどん早くなってきました。

モーターの音が高くなり、これ以上は無理だと思われたときに、また石原は、田中に向かって

、

「オフ。」といいました。田中が、いわれたようにしていると、石原は続けて、

「今度は、電車の速度が、あまり落ちないうちに、また、モーターに電気を、送って力行して下さい。力行と、惰行を何回か、繰り返してみてください。」といいました。

いわれて、田中は、力行と惰行を何回か繰り返しているうちに、右に廻るカーブ見えて来ました。すると石原は、

「カーブは、惰行で通過します。モーターに電気を送らないで下さい。反対に速過ぎると思ったら、ブレーキを使って、速度を落して下さい。」

石原にいわれた、田中は、力行と惰行を何回か、繰り返しているうちに、線路が右に曲がっている、大きなカーブが見えてきました。

すると、田中は石原に、

「田中さん、カーブは惰行で通過します。マスコンのハンドルを、オフ にして下さい。それでも速過ぎると思ったら、ブレーキを操作して、速度を落して下さい。そしてカーブを、通過し終わったら、またマスコンを操作して、電車の速度を上げて下さい。」と言われました。

いわれた田中は、カーブの入口に着くまでに、速度を落しました。それも歩いているよりも、遅い思われるほどでした。

カーブをユックリ通過すると、田中は、マスコンを操作し、電車はまた勢いよく、走り出しました。見ていた、石原は、省線の駅前にある、この電車のための駅が見える頃になると、

「田中さん、駅のホームの手前で止めて下さい。駅には入らないで下さい。」といいました。

電車は、ホームの先端より、だいぶ手前で止まりました。石原は、

「ここを、当分の間こちら側の終点にしましょう。目印にこの赤い旗を立てますから。」といて、電車から降りて、線路の脇に、旗を立てました。それには赤い布が縦に二枚付いていました。そしてまた、

「これからは、この旗のところ、電車をピタリと静かに止められるように、練習して下さい。温泉町のほうにも、赤い布が二枚付いた旗を、立ててありますから。その間で、練習して下さい。」

また、同じ線路で二台の電車が、行ったり来たりするので、衝突や追突する危険があります。それで、それぞれの終点を50m、ずらすことにしました。また、後から出発する電車は、先に出た電車か五分後に出発します。それでも心配ですから、先行する電車の車掌と、後を走る電車の運転士は、十分に注意して下さい。」といいました。

やがて、車庫を後から出発した、小野組の電車がやって来ました。石原組より50m手前には、赤い布が一枚の旗が立っていました。こちらの電車も、止まったところは、だいぶズレていました。

小野組が、また温泉町へ戻って行き、五分たつと、石原組は、島田が運転士になって、温泉町

へ向かいました。

いま習得することは、まず運転士は前を見たままで、マスコンやブレーキを操作して、自分が思うような速度で、電車を走らせ、目標にピタリと、静かに止めることが、出来るように、なることでした。

もう一つは、自転車より速い乗り物を、自分で動かした経験がないので、電車の速度に恐怖を持たないで、必ず止めることが出来るという、自信を持つことでした。

だんだん慣れてきたので、力行を始める所、惰行を始める所、ブレーキを掛け始めるところを、決めて、その場所の電柱に看板を取り付けました。力行はO、惰行はX、ブレーキは△にしました。

また、ここの電車は、注文流れだったので、連結運転が出来る、設備は搭載されていませんでした。

多客時、土曜日曜は、二台で続行運転を、することにしていました。

電車は、夜も走ります。

三日後には、朝の開始を遅くして、夜の練習も始めました。

初日は、月も出ていないので、真っ暗でした。電車のライトだけが頼りでした。

どこを、どう走っているのか、全く判らない状態でした。だだ頼りになるのは、力行、惰行の看板だけでした。それを捜しながら、走っていくので、速度はどうしても、遅くなってしまいました。

これも、慣れるに従って、昼間と同じ速度で、走ることが出来るようになりました。

いままでの、練習のときには、お客さんは乗っていませんでした。お客さんが乗れば、電車は重くなります。

そのとき、電車の速度の上がりかたは、どうなるのか、またブレーキを掛けたとき、速度の落ちかたは、どうなるのか、それこそ、運転士として知っておく、必要があります。

といって営業開始前なので、お客さんの代わりに荷物で、代用することにしました。

いままでも、各旅館の小僧さんが、省線の駅まで引き取りに行っていた。荷物の輸送を、引き受けることにしました。そして、旅館で差し支えなければ、終電車まで、お客さんの代わりに、この荷物に乗ってもらいました。

運転士達は、自転車もそうだったから、速度のあがりかたも遅く、ブレーキのききかたも、悪いと予想はしていましたが、こんなに悪いとは、思わなかったといい、ブレーキを掛け始める看板を、もっと手前に移動しました。

いよいよ、最後は、ホームで、電車を待っている、お客さんの前に電車を、ピタリと、静かに止める練習です。

省線の駅前の駅は、なかなか、土地をわけてもらえず、やっとこじ開けて作った、たった一本の線路とホームです。

そのホームも、短かったのです。 続行運転をしているときに、後から来る電車は、前の電車のすぐ後ろに止めなければ、なりませんでした。

追突するのが、怖くて、なかなか、前の電車のすぐ後ろに止めることが、出来ませんでした。

苦肉の策として、後ろの電車の後ろが、ホームからはみ出した場合は、後ろの出入口は、使わないことにしました。

一方温泉町の駅、「湯ノ津温泉」は、広いホームの両側に、線路が二本できたので、こんな心配はしませんでした。

電車を動かします

<http://p.booklog.jp/book/29735>

著者 : oerxx

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/oxdream/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/29735>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/29735>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.